

より実践的なコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

～6年外国語活動における学習内容の理解・言語活動の充実を通して～

三ツ渚小学校

菊地 悠

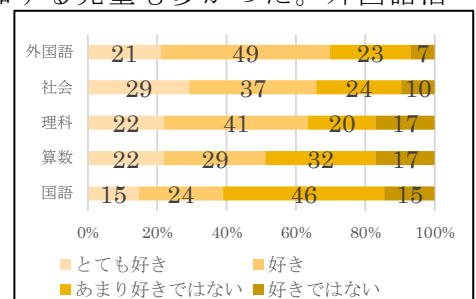
1 はじめに

文部科学省は小学校外国語科の育成すべき「資質・能力」として、「外国語を通じて、身近で簡単なことについて、読んだり書いたりすることに慣れ親しませながら、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことのうち、特に聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う基礎的な力を養う（思考力・判断力・表現力）」「外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、相手に配慮しながら外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う（学びに向かう力・人間性）」を挙げている。また、英語教育改革の一環として、「実際のコミュニケーションを行う言語活動を一層重視し、小・中・高等学校を通じて、授業で発音・語彙・文法等の間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することと、英語を用いてコミュニケーションを図る体験を積むことが必要」としている。このことから、小学校外国語科では、自分の思いを伝えるための思考力・判断力・表現力や、相手に配慮した実践的なコミュニケーション能力の育成につながる活動が求められている。

2 主題設定の理由

より実践的なコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
～6年外国語活動における学習内容の理解・言語活動の充実を通して～

昨年度担任した6年生は、外国語活動に前向きに参加する児童も多かった。外国語活動に関する事前アンケート（H30.12月実施）では7割が外国語活動を「とても好き」「好き」と回答している（資料1）。これは、他教科の結果と比べると高い数値である。好きな理由として、特に「友達と話すこと」や「ALTの先生が話していることを聞き取れたこと」などが挙がっていた。一方で、外国語が苦手と感じている児童からは「発音がよく分からない。」「自分の考えが正しいか不安。」「先生が何を言っているか分からないことがある。」という声が聞こえてきた。そのような児童ほど、授業中になかなか自信をもって発言できないでいることが多かった。そこで、学習内容を理解もしくは推測でき、目的意識を



資料1 教科に対する意識調査

もって英語を使用する場面を増やすことが、自信をもって外国語活動に取り組む児童を増やせるのではないかと考え研究主題を設定した。

3 研究の方法

(1) 目指す児童像

- 進んで自分の考えを表現しようとする児童
- 分からない表現に対して意味や内容を推測・理解しようとする児童
- 学んだことを実践しようとする児童

(2) 研究の仮説

仮説Ⅰ ペアやグループで伝え合う時間を確保することで、自分の考えに自信をもち、自ら考えようとする児童が増えるだろう。

仮説Ⅱ 学習する内容をめあて（Today's Point）やキーセンテンスとして焦点化することで、学習内容を推測・理解しやすくなるだろう。

仮説Ⅲ Activity や Small Talk などの言語活動を充実させることで、学んだことを実践しようとする児童が増えるだろう。

(3) 研究の手だて

ア 仮説Ⅰの手だて

① ペアやグループで推測したり確認したりする時間の確保

学習を進める中で、Teacher Talk やデモンストレーション、新出表現など、理解が曖昧になりそうな場面が出てくる。その際、ペアやグループで推測したり確認したりする時間を確保する。さらに、意見を言った場合も、「どうしてそう思ったの?」「どこからそう思ったの?」など追加の質問をする。話し合いの中で理由や根拠も伝え合えるように促すことで、自ら考えようとする児童が増えるだろう。

イ 仮説Ⅱの手だて

① 毎時間活動のめあてを提示

他教科と同様に外国語活動でもめあてを提示し、本時のねらいを理解することで、目的意識をもって学習に取り組むことができ、めあてに対してふり返ることができるだろう。

② キーワード、キーセンテンスの常設による児童への意識づけ

小学校外国語活動では、「話す」「聞く」が中心であり、キーセンテンスも簡単に板書されるだけであった。それでは定着しにくいため、質問と答えの表現や、

使用する単語の絵カードを黒板に掲示し活動中に児童がいつでも確認できるようにする。また、必要なことを書き留めておけるよう、ワークシートの使い方を工夫させる。外国語活動では学習しても、次の時間には単語やフレーズを忘れてしまうということが珍しくない。そこで毎時間ワークシートを配布し、表には覚えておきたいことをまとめ、裏にふり返りを書けるようにする。そうすることで、学習内容の蓄積・把握がしやすくなるだろう。

③ 担任によるスピーチ (Teacher Talk)

聞き取れた単語や音をワークシートに記入し、そこから内容を推測する活動を行う。Teacher Talk の内容は「児童が知っていること」や「本時のめあてに沿ったもの」とし、キーセンテンスを盛り込んだ内容にする。そうすることで、聞き取れた単語が少なくても、内容を推測しやすくなり、さらに聞き取れた単語を友達同士で確認することで、内容をより理解しやすくなるだろう。また、ワークシートを蓄積していくことで成果が見え、自信につながるだろう。

ウ 仮説Ⅲの手だて

① 児童がコミュニケーションをとりたくなる活動の実施

言語活動や Small Talk の時間を作り、児童がキーセンテンスを使用する場面を増やす。コミュニケーション活動について『小学校外国語活動研修ガイドブック』では、「活動そのものがコミュニケーション活動になるように設定する必要がある。」「指導内容として設定された表現を聞いたり、話したりすることが自然であるような場面を、児童の興味・関心・生活から選択し、それに基づき活動を組むことが求められる。」としている。本研究でも、Activity の内容を実際に児童が知りたいことや目的意識をもって行えるものに設定する。そうすることで、自ら友達と質問し合い、活動後には達成感を味わうことができるだろう。

② Reaction words の提示

児童は日本語であれば、日常的に「本当?」「私も」「へえ」などの反応を示しながらコミュニケーションをとっている。しかし、英語での会話になると、定型文のみのやりとりに終始する傾向がある。そこで、英語にも「Really?」「Me too!」「Wow!」など、反応を示すための Reaction words があることを示し、Activity や Small Talk の中での使用を意識させる。そのことで、より実践的なコミュニケーションがとれている感覚をつかませたい。

(4) 検証計画

1. 外国語学習に関するアンケートを実施（事前 H30.12 月実施・事後 H31.3 月実施）
2. ワークシート（Teacher Talk、ふり返し）
3. 発言（グループでの話し合い、Activity、Small Talk）
4. 中一アンケートを実施（R1.6 月実施）

対象：本校(A 小)出身者 37 名、B 小出身者 48 名

4 研究の実際

ここでは、2つの単元での実践を例に挙げ、その考察を行う。

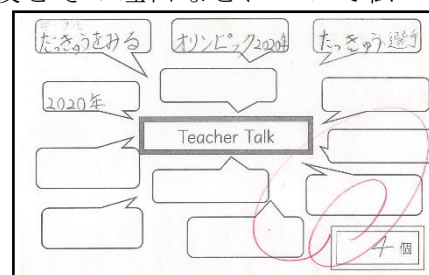
(1) 実践1 We Can!2 Unit6 What do you want to watch? (4 時間完了)

Unit6 は「オリンピック・パラリンピックで観たい競技とその理由などについて伝え合う」という単元目標を設定し、実践を行った。

【導入】

授業の導入として、担任によるスピーチ（Teacher Talk）を毎時間行った（仮説Ⅱの手だて③）。内容には、

①児童が知っている情報、②本時の活動につながる文型、③児童が知らない単語や表現の3要素を盛り込んだ。Unit6 では特に①の要素を多く取り入れ、聞き取れた単語や音をワークシートに記入させた（資料2）。



資料2 Unit6 での児童のワークシート

第1時では、I like volleyball. Because, I'm good at volleyball. I can jump high. I'm good at serves and spikes. I'm not good at receiving. But it's fun. So I like volleyball very much. とスピーチをした。担任が「バレーボールが好き」であることは児童にとって既知の事柄であったため、多くの児童がその表現については聞き取ることができた。しかし②③に当たる I'm good at や receiving など一度で聞き取ることが難しかった。二度目は「ゆっくり」「はっきり」「ジェスチャーをつけて」話した。すると'but' 'fun'など、これまでも活動の中で使ってきた単語を聞き取れる児童が出てきた。「グループで相談してごらん。」と伝えると、「ジャンプって言ってた?」「リシなんとかって聞こえたんだけど」と、何とかして単語をつなぎ合わせて、意味をつかもうとする様子が見られた（写真1）。しかし、クラス全体で確認する段階での挙手は数名にとどまった。多くの児童は、聞き取れることはできても日本語で何を意味しているかが分からず答えられなかったようである。そのため、「意味は分からないけどこんな音が聞



写真1 聞き取れた音を相談する様子

こえたっていうのはある？」と追加の質問をすると、多くの児童の挙手があった。「グッダット(**good at**)って聞こえた気がするんだけど、どういう意味か分からない。」と発言する児童がいた。「**good**」「**at**」「**Volleyball**」とジェスチャーを交えて示すと「バレーが良い。バレーが上手ってこと？」とグループの児童と話しており、納得した様子であった。

第2時以降も同様に、児童の「聞こえたけれど意味が分からない単語」や「②本時の活動につながる文型」の確認を中心に行った。

【展開】

Teacher Talk の内容を把握後、「Today's Point」

「Today's words」「Key Sentence」を提示した（仮説Ⅱの手だて①、仮説Ⅱの手だて②）（写真2）。第3・4時では Activity として「人気のある競技探し」「観たい競技が同じ友達探し」を行った。前時に

Do you want to watch～？に Yes, I do. / No, I don't. で答えることを学習していたため、文頭が What sports になると意味や答え方がどう変化するかを確認した。

Activity では、一人一人とコミュニケーションを図るため、①理由を聞くこと②相手の言葉に対して反応をすることを活動する条件として提示した（資料3）（仮説Ⅲの手だて②）。すると、一人と話す時間が長くなることで、質問できる人数は限られたが、理由も聞こうとする様子が見られた。

【まとめ】

Small Talk では、ペアで質問し合う活動を行った。What sports do you like? の質問を基本とし、第4時には、質問のテーマを競技に限らず「好きなテレビ番組」「好きなアニメ」「好きな食べ物」など、自分で聞きたいことに置き換えて質問し合うよう声をかけた。「Reaction words がいくつ使えるかな？」と使用を促すと、多くの児童が意識して反応を示そうとする様子が見られた。

【考察】

Teacher Talk では、回を重ねるごとに聞き取れるようになってきたが、中には日本語で意味が分かる単語のみを書いたり、一文一文を和訳しようとしたりする児童もいた。分からない単語を推測するためにも、「単語の意味ははっきりと分からなくても良

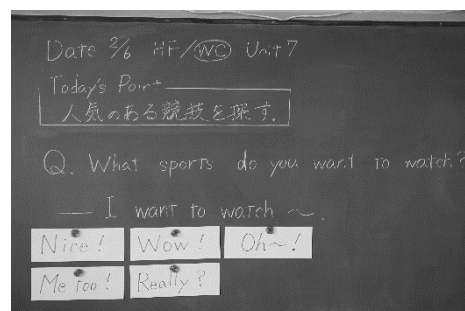


写真2 Unit7 第2時の板書

Reaction Words

1. Oh~!
2. Really?
3. Me too.
4. Wow!
5. Nice!

資料3 提示した語

Activity や Small Talk では、新しく学習した Reaction words を嬉しそうに使う様子が見られた。日本語での日常会話を例に挙げ、相槌を打ちながら会話をするのは英語でも同じであること、それぞれの Reaction words が日本語ではどんな意味に当たるのかを確認したことで、児童にとって英語での反応が身近になったようであった。

(2) 実践2 We Can!2 Unit7 My Best Memory (3時間完了)

【導入】

Teacher Talk は、前単元で使用した 3 要素に加え、毎時間使用する単語、前時の学習で確認した単語を取り入れた。第 2 時では「一番の思い出は修学旅行」と話し、その中で「**Buddha**」という単語を使用した。児童は何のことか分からず「ブタ?」「ぶった?」と困惑していた。相談し合う中でも「グレートなブタ、すごいブタ?」「でも、西陣織って言っていたから京都でしょ、豚なんていた?」と懸命に周囲の言葉から推測しようとしていた。そこでジェスチャーを加えて改めて「**I saw a great Buddha.**」

Teacher Talk

ファイ ベスト

メモリー

スワールトゥリブ

京都市 奈良

うんかくし

グーグルマップ うんかくし

オホー

東大寺

グレート フォード

アプレイン

ディーア

11 個

【展開】

第2時に「クラスの思い出ランキング作り」を行った。①クラスで一つのものを作る
こと、②クラス全員に質問すること、③Reaction words を使うことの3点を指導し

たのち活動に入ると、約10分間の活動の中で、児童は20回以上の質問・回答・反応を行った。また、ランキングを確認すると、1位修学旅行、2位運動会、3位音楽会、4位校外学習・収穫感謝祭と全員のランキングが一致しており、それぞれが理解しながら会話を行っていたことが分かる。

【まとめ】

Small Talk では、隣同士で好きな〇〇を聞き合う活動を行った。Activity の中でも児童同士の Reaction words の使用が活発になってきたため、本単元では、Reaction words に「why?」を追加した。すると、会話が資料5のように変化した。

C3 : What sports do you like? C4 : I like badminton. C3 : Really? C4 : What foods do you like? C3 : I like cakes. C4 : Nice!	C3 : What colors do you like? C4 : I like blue. C3 : Really? Why? C4 : Because It' s cool. C3 : Nice! C4 : What colors do you like? . . .
---	---

資料5 児童の会話内容の変化

「Why?」という一言を付け加えることで、少なくとも一往復の会話が児童の間で増えたことが分かる。また、使用する Reaction words の種類も増え、ジェスチャーをしながら反応を示そうとする児童もおり、コミュニケーションのバリエーションが増えてきた（写真3）。



写真3 ジェスチャーで示す児童

【考察】

Teacher Talk では、多くの単語を児童が聞き取れるようになった。その中には第2時までに使用した「memories」や「school trip」「Buddha」などが含まれていた。前時に確認した単語を使用することで、児童の理解を深めることができた。

Activity では、Key Sentence や Keyword を確認しながら笑顔で質問し合う姿や、めあてを達成しようと積極的に友達に声をかけている姿が見られた。全員と会話をすることで児童は20回以上

友達好きな行事も聞いて答えているうちにだんだん英語で話すスピードがけっこう速くなったので、いつでもいえるようにしたいです。

Key Sentence やそれに対する回答を発話したことになる。第2時のふり返しでは、多くの児童が「話す活動」

話す活動のときに同じことを何回も言うので、しんどいと感じることができました。

がよくできたと自己評価していた。児童のふり返し（資料6）からも、目的意識をもった発話量の確保が、話せているという自信や達成感につながったと考えられる。

資料6 児童のふり返し

また、Small Talk では児童同士のやりとりが増えたことに加えて、会話の質に変化が見られた。「Why?」を導入したことで、理由を尋ね合うようになったが、さらにあらかじめ自分から理由を伝える児童が現れた（資料7）。この場合、会話の往復自体は

少なくなるが、理由を聞かれることを待つだけでなく自分から話そうとする行動は、コミュニケーションの幅が広がった結果だと言える。

C5: What sports do you like?
C6: I like tennis. **Because It's fun.**
C5: Oh nice!
C6: What sports do you like? . . .

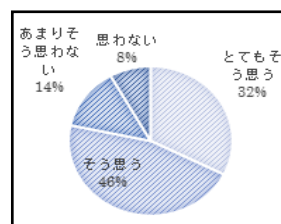
資料 7 Small Talk でのやりとり

5 研究の成果

(1) 仮説Ⅰについての成果

ア 「ペアやグループで推測したり確認したりする時間の確保」について

Teacher Talk や Key Sentence、Activity の導入などで適宜ペアやグループで話し合う時間を確保した。聞き取れた単語や様子から意味や活動内容を推測できる児童が増えた点において、ペアやグループで確認することや追加の質問をすることは有効であったと言える。一方で、自ら手を挙げて発言しようとする児童の数は、実践前後であまり大きな変化が見られなかった。しかし、事後アンケート 2 (A 小 37 名) では、「小学校外国語活動が役に立っている」と回答した生徒が約 8 割 (資料 8) で、発言にはつながらなかったものの、学習内容には満足していたと考えられる。



資料 8 小学校外国語活動は役に立っていると思うか

(2) 仮説Ⅱについての成果

ア 「毎時間活動のめあてを提示」について

Today's Point を常に黒板に提示しておくことで、児童の活動への取り組み方に変化が見られた。以前であれば楽しんで終わりがちであったゲームにも、めあてを意識して取り組むことができ、児童から「今日のめあては〇〇だから…」といった声が聞こえるようになった。さらに、めあてを意識して本時の Key Sentence を使ったふり返りを書く児童も増えた。

イ 「キーワード、キーセンテンスの常設による児童への意識づけ」について

多くの児童が、実践前と比べてよく黒板を見るようになった。Key Sentence や Keywords を見て使おうとしていたことから、見ることが安心につながったのだと考えられる。また、ワークシートを活用する児童が現れたことも成果と言えるだろう (資料 9)。黒板の Key Sentence を書き写すことに加え、授

Date 2/25 HF (WC) Unit 17 Name ()

Today's Point 思い出の行事ランキングを作る!

フットボール 水泳大会 → 歴史

Notes

Q. What's your best memory?

- My best memory is ~

Because I enjoyed ~

like ~

Saw ~

資料 9 児童のワークシート

業中の Activity のメモや気づいたこと、大切だと思ったことなど、必要なことを残すために使えていたことは、大切なことを把握しようとする意識の表れであると言える。

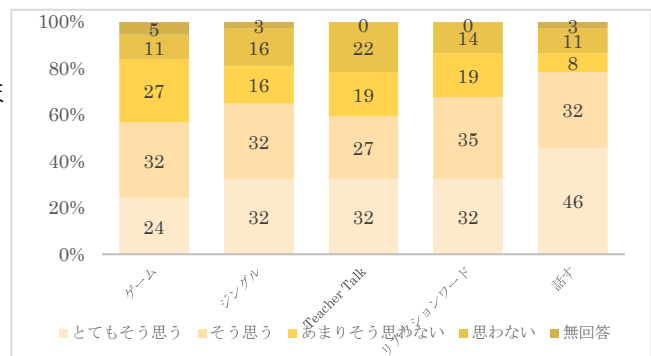
ウ 「担任によるスピーチ (Teacher Talk) の聞き取り」について

以前は、スピーチの内容把握には全ての語彙の理解が必要だと考える児童が多く、ワークシートにメモをする単語も、「聞き取れた」＋「意味が分かる」ものを日本語で書く児童が多かった。「聞こえた言葉や音をそのままメモすること」、「日本語で書く必要はないこと」を伝え続けることで、回を追うごとに児童の意識が「知っている言葉探し」から「どんな音が聞こえてくるか」に変化していった。その結果 Teacher Talk では、それぞれが聞き取れた単語や音をつなぎ合わせることで「〇〇って言うていたからだいたいこんなことだと思う。」とスピーチの中に含まれるキーワードから、おおまかな内容をつかむことができた。

- ・自分の力でたくさん聞き取れるとうれしい。
- ・先生が言ったことを考えるのが楽しい。
- ・Teacher Talk で習う英語を楽しく覚えられる。

事後アンケート (H31.3 月実施) (資料 10)

資料 10 楽しかった理由 (一部抜粋)



では、楽しかった活動として Teacher Talk を挙げる児童が多かった。また、メモを取ったワークシートをファイリングすることで、初めと比べてどれだけ聞き取れるようになったかが目に見えたことも、成長を実感する要因となった。加えて、事後アンケート 2 (R1.6 月実施) では、約 6 割が Teacher Talk が役に立っていると答えている (資料 11)。その理由 (資料 12) から、Teacher Talk が学習内容の理解の助けとなったと言える。

資料 11 中学校の学習に役立っている外国語活動の内容

- ・ Teacher Talk で話してくれた内容に、中学校で習った単語も入っており、予習になった。
- ・ Teacher Talk で意味が分からず質問していた単語がたくさん出てきているから。
- ・ 聞き取る力がついたから。
- ・ 中学校でリスニングとか聞き取るとき、大体聞き取れるようになった。
- ・ いろいろな単語を覚えられた。
- ・ リスニングのときに役立った。

資料 12 Teacher Talk が役立った理由

(3) 仮説Ⅲについての成果

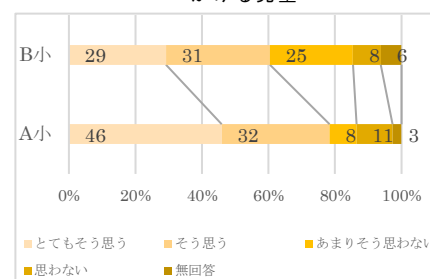
ア 「児童がコミュニケーションをとりたくなる活動の実施」について

Unit6 では「人気のある競技探し」と「見たい競技が同じ友達探し」、Unit7 では「思い出の行事ランキングづくり」を行った。目的を達成するために児童が自ら話しかけ、結果を出すことで、達成感を味わえる活動になった。活動の中で、一人一

人の発話量を十分確保することができた点、友達の間を見て会話ができるようになった点（写真 5）も児童の達成感に影響を与えたと考えられる。事後アンケート 2（A 小 37 名、B 小 48 名にそれぞれ実施）では、「小学校での話す活動が役立っているか」という質問に対する回答に明らかな違いが現れた（資料 1 3）。B 小が「とても思う」「そう思う」の割合が 6 割であるのに対して、本校は約 8 割が役立っていると回答している。このことから、小学校での Activity や SmallTalk が児童の話す活動に影響を与えていることが分かる。



写真 5 相手の目を見て話しかける児童



資料 1 3 小学校での話す活動は中学校で役立っていますか

イ 「Reaction words の提示」について

多くの児童が、Activity や Small Talk の中で自然に反応し合うようになった。互いに反応し合うことで、会話が弾み、「今日は Reaction words が 3 個使えた」「友達の言っていることに反応できた」と達成感を得ることができた児童も多かった。事後アンケート 2 でも、Reaction words を使うことが、中学校の学習に役立っていると考える児童は約 7 割いた。「中学でも使うから。」「リアクションすることで話しやすくなる。」「Really?などを会話で楽しむことができるから。」と、会話の中で役立てられていることがうかがえる。このことから、Reaction words を使用することが、児童のコミュニケーションを豊かにする効果があったと言える。

6 今後の課題

今回の実践を経て、相談し合ったり英語でコミュニケーションを図りたいと思う活動を取り入れたりすることは、学んだことを使ってみようとする児童の学習意欲につながる結果となった。アンケートからも、目的意識をもって行う活動を取り入れることで中学校進学後の児童の取り組みにつながることも分かった。しかしながら、小学校の時点で既に外国語を苦手とする児童が一定数いることも事実である。外国語が教科化されるにあたり、より児童の実態に合った活動を選択していく必要がある。より実践的なコミュニケーションを図れる児童を育成するためにも、担任だからこそできる活動を模索し、今後も研究を続けていきたい。